

# チョムスキーはソシュールをどう読んできたのか

斎藤 伸治

## 1. はじめに

ソシュールとチョムスキー—言語学という特定分野の狭い枠を超えて、隣接するさまざまな関連領域に深い影響を与えた、20世紀の西洋言語思想を代表するこの2人の思想家の間には、いったいどういった関係がみられるのか。もっと具体的に言えば、チョムスキーはソシュールをどのように理解し、チョムスキーの著作・論文においてソシュールはどのような形で引用されているのか—これを考察するのが本稿の目的である。ソシュールの *langue* と *parole* の区別と、それに少なくとも表面的には対応するようにみえるチョムスキーの *competence* と *performance* の区別、そして何よりも、具体的な発話活動の背後にあって、それを規制する抽象的な体系としての *langue* あるいは *competence* を言語研究の本来の対象としたことなど、両者の間には大きく重なるように思われるところが少なくない。実際にチョムスキーは、生成文法理論の創成期の時からずっと、さまざまな機会にソシュールに言及している。しかし、チョムスキーがソシュールをどう理解し、また評価していたかについて明確に述べるのは、意外に難しいように思われる。

その理由としてまず挙げなければならないのは、チョムスキーの著作などにみられるソシュール像には、生成文法理論の理論的發展とともに、いくつかの点で明らかな変化がみられるということである。チョムスキーの生成文法理論と言えば、一般的にはデカルトに始まりヴィルヘルム・フォン・フンボルトを頂点とする合理主義的言語観の流れの中に位置づけられるのが普通であり、ソシュール言語学というよりも、むしろこのデカルト派言語学、特にフンボルトの言語学との結びつきが強調される。

しかしフンボルトとの結びつきが明確に主張される以前には、むしろソシュールこそが西洋言語思想史上における生成文法理論の理論的先駆者とみられていた。そして生成文法理論の理論的枠組みが変化していくにつれて、チョムスキーのソシュールに対する見方も微妙に変化してくるのである。ただその際には、ソシュールあるいは彼の弟子たちによってまとめられた『一般言語学講義』の側にも、その原因となる要素はあったように思われる。この『一般言語学講義』では、例えば *langue* の考え方はあまり明確な形では提示されているとは言えず、場合によってはかなり異なる解釈が可能のように思えるところもあるからである。そして実際、次節以降で詳しくみていくように、特にこの *langue* という概念の解釈を中心に、チョムスキーのソシュールの理解も、変化していったと考えることができるのである。

## 2. チョムスキーとソシュール、フンボルト

アメリカの言語学界において、ソシュールは長い間ほとんど読まれることもなく（例えば、Baskin による『一般言語学講義』の最初の英訳が出たのは 1959 年）、ブルームフィールドがアメリカ人でただ一人『一般言語学講義』の書評（1924 年）を書いた人物であったが、それもほとんど誤った解釈に基づくものであった（Harris (2001), Joseph (2002), 丸山 (1981) などを参照）。そしてブルームフィールド以後の学者たちもソシュールに対する言及がごくまれだったのに対して、チョムスキーは何度もソシュールへの注意を喚起している。ただし丸山 (1981) は、『言語と精神』から次のようなチョムスキーのソシュールに対する評価の引用を挙げて、チョムスキー自身の場合も、ソシュールの理解の仕方がかなり誤解に基づくものであったということを指摘している。<sup>1)</sup>

1) 以下、引用するにあたっては、邦訳のあるものについてはその訳とその頁数を用い、ないものについては拙訳と原著の頁数を用いている。

(1) 偉大なスイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールは、世紀の替りに近代の構造言語学の基礎を据えたが、言語分析の妥当な方法は分割と分類のみであるという見解を出した。こういう方法を適用して、言語学者はこのように析出された単位が並びあうパターンを決定する。—これらのパターンが統合的、すなわち発話の流れのうちの文字どおりの継起のパターンであるか、連合的、すなわち発話の流れのうちで同じ位置を占め得る諸単位のあいだの関係であるかである。ソシュールは、あらゆるそういう分析が完全になったとき、言語の構造は必然的に完全に開示され、言語の科学は自己の課題を完全に実現したことになる」と称した。… わたくしの言及しているのは、「発見の手順」、ソシュールが言及したあの分割と分類の技術である。… それが失敗であったのは、そのような試みはせいぜい表層構造の現象に限定され、したがって、言語使用の創造的面と意味内容の表現との根柢に所在するメカニズムを開示することができないからである。(39 - 44 頁)

丸山 (1981: 50- 1) は、チョムスキーが「何故かソシュールをブルームフィールドと重ね合わせてしまった」と指摘し、チョムスキーのソシュール理解が「あまりにも浅薄」であること、さらに『『言語と精神』が出版される 10 年前に出た R. ゴデルの『原資料』はおろか、『講義』自体に果たして目を通していかどうかまで疑わしい」とまで言い切っている。<sup>2)</sup> しかし上の引用において、チョムスキーが、実際にブルームフィールドとソシュールとを「重ね合わせ」ているとすれば、その理由はもっとずっと複雑なように思われる。というのも、丸山の批判にも関わらず、チョムスキー自身が語っているところによれば、彼は 1960 年あたりに英訳されたばかりの『一般言語学講義』(Baskin 訳) もゴデルの『原資料』も読んでいるということであるし (Joseph (2002 :

2) 実際にチョムスキーはそもそもソシュール、そしてさらには言語思想史というものに対して正しい理解をもっていなかったのではないか、という指摘もよくみられる。すぐれたソシュール研究者であるデ・マウロもまた、『『ソシュール一般言語学講義』校注』補注 (225) においてその旨のことを述べている。なお、Aarsleff (1970) なども参照のこと。

147), また実際にゴデルを何度か引用してもいるのである。つまり興津(1996:179)でも指摘されているように, チョムスキーの言語学の歴史的考察を行う際には, まず生成文法理論が, その直前のアメリカ構造主義言語学の原理や方法論の批判の上に築かれたものであり, 両者の対立が常に意識されていたということ, またチョムスキーが生成文法理論を, これに先行する, 同質的な言語研究の伝統によってその正当性を実証しようと望んでいたことなどを留意しなければならない。

要するに, (1)にみるようなソシユールに対する評価は, 単にチョムスキー自身の理解の不十分さからくるのではないのである。実際, 第3節でも詳しくみていくように, チョムスキーは, この『言語と精神』が書かれる以前には, ソシユールを, ブルームフィールド及びその後の新ブルームフィールド学派とは違うものとみなし, むしろ積極的に自身の立場に近いものとして提示していたのである。チョムスキーの描くソシユール像は, その時期その時期における理論的・方法論的関心事と決して無縁なものではなく, ソシユールに対する評価も, それに応じて, 変化が生じているということである。

この『言語と精神』が書かれた時期, もっと正確に言えば, 1964年, 1965年あたりから1980年にかけて, チョムスキーがソシユールをアメリカ構造言語学と結びつけてかなり批判的に述べ, 自らの言語学をむしろ「デカルト派言語学」という合理主義的言語思想の伝統のなかに位置づけたのは, その時期の生成文法理論の理論的發展と力点の置き方(深層構造, 言語使用の創造的面などの擁護)からくるものだったと考えるべきであろうと思われる。例えばこの時期の理論的立場「標準理論」を代表するChomsky(1965)の「まえがき」では, 次のように述べられている。

(2) 言語 (a language) は, その無限に多い文の解釈を決定する規則の体系に基づいている, という考えは, 決して目新しいものではない。1世紀以上も前に, それは, Wilhelm von Humboldtによって, 彼の有名な,

しかし、まれにしか研究されない一般言語学概論 (Humboldt, 1936) の中で、かなり明確に述べられている。言語は、「有限の手段を無限に利用する」(“makes infinite use of finite means”) のものであり、また、その文法は、これを可能にする過程 (processes) を記述しなければならない、という彼の考え方は、さらに、言語と精神に関する合理主義的哲学 (rationalistic philosophy) 内における、言語使用の「創造的な」面に関する根強い関心から、自然に発展してきたものである。

チョムスキーのソシユール批判の主たる対象は、何よりもまずその langue の考え方にある。言語の「無限の創造性」に対して、langue は記憶によって蓄積された語彙項目の目録にすぎないとされる。Chomsky (1965) では、「彼 (筆者註：ソシユール) の考えている langue は、項目を組織的にまとめた一覧表であるにすぎず、われわれはこの考えを捨て、むしろ、フンボルト流に、根底にある言語能力を、生成過程の体系であるとする考え方にまで、さかのぼる必要がある」(5頁) として、ソシユールではなく、フンボルトの方を採るべきことが宣言される。Chomsky (1977) に至っても、依然としてソシユールの評価はきわめて低く、次の(3)では、むしろイエスペルセンをデカルト派言語学に連なるものとして高く評価し、ソシユールは彼と対峙するものと捉えられている。

(3) かれ (筆者註：イエスペルセン) は一方では『文法の原理』によって哲学者であり、他方では英文法の著作によって文法家でもある。その哲学上の仕事では、自由表現—ぼくがことばの創造性と呼んでいるもの—という考えを強調した点で近代の先覚者のひとりだ。その点では、かれは多くの構造主義者たち—このテーマについてかなり素朴な事柄を述べたソシユールをもふくめて—よりずっと先に進んでいる。この考えは、デカルトとフンボルトによって前の時代に主張されたのだが、…。(225頁)

このような文形成や言語の創造性の問題をソシユールの *langue* では正しく扱うことができない、とチョムスキーは考えていた。以下の Chomsky (1968) からの引用にみるように、ソシユールの *langue* は、記憶によって蓄積された言語要素すなわち語彙項目であり、文の形成、言語の創造性の問題はパロールの領域に属する、とされたのである。

(4) かれ (筆者註: ソシユール) は時折、文形成の過程は言語体系に全然属さない、一言語体系は音声、語、おそらくわずかな数の固定した句と少数のきわめて一般的なパターンに制限されるという見解を表明した。文形成のメカニズムはこの他には、言語構造そのものが課するあらゆる制約から、自由であるというのである。こういうわけで、彼の立場からすれば、文形成は厳密には言語 (ラング) に属する事柄ではなくて、彼が言 (パロール) と名づけたものに帰属するとされ、狭義の言語学の視野の外に置かれる。それは自由な創造の過程であって、言語規則が語の形式や音声のパターンを支配する限りのほかには、言語規則によって制約されることがない。統辞法は、この立場では、むしろ取るに足らない事柄である。(40 頁)

ではそれ以前には、ソシユールに対して具体的にどのような評価をしていたのだろうか。チョムスキーが、初めてソシユールの名前に言及するのは、Joseph (2002) によれば、1963 年の論文からである。

### 3. 第 9 回国際言語学者会議とその前後 (1962-1964)

チョムスキーの著作・論文において最初にソシユールの名前が言及されるのは、Joseph (2002) の詳細な研究によれば、1963 年の “Formal Properties of Grammars” という論文においてである。Joseph (2002), そしてデ・マウロ (1976) もまた指摘するように、この論文におけるチ

ヨムスキーは正にソシュール主義的と言ってよく、第2節でみた時期の著作・論文とは異なり、チョムスキーのソシュールに対する評価は非常に好意的である。むしろ、このあたりから1964年までの間に発表された論文は、基本的にソシュールを積極的に自身の言語論の拠り所としていたことがわかる。Harris (2001:155) は、その理由として2つの点を指摘している。1つは、ソシュールがブルームフィールド以前における非常に著名なメンタリストと考えられていた、ということである。この時期のチョムスキーは、B.F. スキナーの著作 *Verbal Behavior* に対する書評論文 (1959) を著し、当時支配的だった新ブルームフィールド学派の行動主義的言語観に対し激しい攻撃を加えていた時期でもあり、ブルームフィールド以前に現れた自己の言語観の先駆けとなるメンタリズムの擁護者として、ソシュールを位置づけていたと考えられるのである。そしてもう1つは、ソシュールは *langue* と *parole* の区別を強く主張し、*langue* を言語研究の真の対象と考えていたわけであるが、これが、規則の抽象的な体系を研究の対象とし、(アメリカ構造主義言語学のように) 実際の発話状況におけるその実現にはあまり注意を向けないとする生成文法理論の考え方に、理論的支柱を与えるものとみなすことができたということである。例えば、Chomsky (1964b) においても、「明らかに、文法によって与えられる内在的能力の記述は、ソシュールがあればほどはっきりと強調したように…、実際の言語運用の記述と混同してはならないのである」(6頁) と述べられている。

このように、この時期におけるチョムスキーの考えでは、『一般言語学講義』と自身の研究との間にできるだけ共通点を見出そうとし、あるいはできるだけ自己の言語学に近づけて、ソシュールの言語学を解釈しようとするものであった。特に、ソシュールの *langue* と *parole* の区別と自己の生成文法理論における *competence* と *performance* の区別と対応させようという姿勢や、*langue* と *competence* とを同一視しようとする姿勢にそれがみられる。しかもその場合に、多少強引にソシュールの理論を自己の理論に引きつけて考えようとしていた、ということも否

定できない。例えば Chomsky (1963:327) では、ソシユールの langue は「話者の脳に表示された文法と意味の体系」とされ、また parole は「話者の発生器官からの音響的出力とその耳への入力」とされている。つまり、文法と意味論が何らかの形で独立している、あるいは少なくとも切り離せるといったことをソシユールもまた考えていたかのようであるが、Harris (2001:153) でも指摘されているように、ソシユールの『一般言語学講義』ではそれとは全く異なった文法の考え方が示されており、自律的なものなどとは全く言えないように思われる。つまり、ここには、文法の自律性を強く唱えていたチョムスキーの考え方がそのまま投影されていると考えられるわけである。さらに、Chomsky (1963:329) では、langue を「構造記述をもつ文を生成する文法、つまり、… 話者の言語直観、話者の言語知識」と全く同じものと考えられている。ここから、ソシユールの langue が本来的にそもそも社会制度的性格のものであることや、あるいは langue が本来的に共時的側面と通時的側面とを併せもつことなども、全く無視されてしまっているということがわかる。ソシユールの langue と自身の competence とを結びつけようとしていることは、次の Chomsky (1964b) からの引用にも、はっきりと現れている。

(5) ある言語を習得した人の中にこしらえられた生成文法は、ソシユールの用語に従って（ただし後に … 明記するような修整を含めて）ラング (langue) と呼びうるものを定義する。話し手または聞き手として（実際の言語活動を）演ずるとき、その人はこの装置を使用するのである。たとえば、聞き手としてのその人の問題は、自分の文法が、提示された発話に与える構造記述を決定すること（あるいは、文が統辞論的に多義である場合、示されたその特定の発話の正しい構造記述を決定すること）と、構造記述中の情報を使ってその発話を理解することである。（6頁）

ちなみに(5)の「後に … 明記するような修整」とは、langue が生成規則の体系にはなっていないのではないかということ、つまり第2節でも



触れた文の形成、言語使用の創造的面の問題と関係している。やはり langue を自身の competence と結びつけようとしても、言語の創造的面の問題は、ソシユールの langue の考え方とはなかなか折り合いがつかない、とチョムスキーが考えていたことがわかる。

ただ、文の形成、言語の創造的面が、langue に属するのか、あるいは parole に属するのかという問題は、langue というものをどう解釈するかによって答えは違ってくる。チョムスキーとは異なり、積極的に文の形成は langue に属すると考えていいのではないかと考えている研究者も少なからずいる。<sup>3)</sup> 例えばゴデルは、「すべての統合は、文を含めて、〈潜勢としての〉〈en puissance〉ラングに属する」と述べている（デ・マウロ（1976）補注 251 を参照）。Harris（2001）の考えも同じである。彼は、『一般言語学講義』より次のような引用を挙げながら、明らかにチョムスキーは『一般言語学講義』（あるいは Baskin によるその英訳）をしっかりと読んでいなかったのではないかと述べている。もし十分にしっかりと読んでいたのであれば、チョムスキーの言う生成規則が扱うことになるような一連の統合が、ソシユール言語学でも langue に属するものとするということができるということを理解できたはずだ、というのである（Harris（2001:165））。

(6) 規則形にもとづいて構成される統合は、そのすべての類型を言（パロール）ではなしに、言語（ラング）に帰属せしめなければならない。（174 頁）

その少し前でも、次のように述べられている。

(7) ひととはここで異議を差し挟むかもしれない。文はすぐれて統合の典

---

3) ちなみに Lyons（1977）によれば、チョムスキー自身が気がついていようとなかろうと、彼は初めからソシユール主義者であり、またソシユールは（フンボルトと同じように）「創造性という特質のもつ重要性」（37 頁）を力説していた、とされる。しかし、これまでの議論から明らかのように、このような主張は疑わしいように思われる。Harris（2001：154）も参照されたい。

型である。ところが文は言（パロール）にぞくし、言語（ラング）にはぞくさない…。とすれば、統合は文のなわばりだということにならないか？われわれはそうは思わない。…（174頁）

確かにこのような引用をみると、文の形成を langue に属すると考えることは十分可能なように思われるが、(6)の引用の数行後では、次のようにも述べられている。

(8) しかしながら統合の領域内では、集团的慣用の標識である言語事実と、個人的自由に依存する言事実のあいだには、截然たる境界のないことを認めなければならない。おおくのばあい、単位の結合をいずれの所属に帰すべきかは、双方の要因がそれを作りだすのに協力してきており、しかもその比を定めえないために、むずかしいのである。（174頁）

要するに、デ・マウロも註で指摘しているように（補注 251）、ソシユール自身も迷っていたということなのである。ソシユール言語学の langue の考え方には、本来そういった曖昧なところがあるのである。<sup>4)</sup>

しかし、少なくともチョムスキー自身は、ソシユールの langue が記憶によって蓄積された言語要素であることは明らかであり、したがって文の形成、言語の創造的面が langue には属さない、と考えていたことは確かである。(5)において langue と「ある言語を習得した人の中にこしらえられた生成文法」とを同一視しつつも、その数頁後で、「ソシユールは、…ラングを、基本的には文法上の特性をもった記号の貯え…と見なしている…。そのため彼は文形成の基底にある繰返し過程を把握することが全くできず、文形成をラングの問題としてよりは、むしろパロール (parole) の問題（あるいは多分何かばく然とラングとパロールの境界上のもの）として、…考えているようである」（18頁）として、langue の考え方に対して批判も加えている。ただし、表現の調子その

4) langue と parole の区別の難しさについては、さらに Culler (1986: 81) なども参照のこと。

ものは、数年後に書かれることになる(4)にみられるものと比較すれば、大分穏やかなものになっていると言えるだろう。(4)では、「文形成は厳密には言語（ラング）に属する事柄ではなくて、彼が言（パロール）と名づけたものに帰属するとされ、狭義の言語学の視野の外に置かれる」と明確に述べられており、自身の生成文法理論とソシユール言語学との間に明らかに距離を置いていた。そして(1)の引用にみたように、ソシユール言語学はアメリカ構造主義言語学と同一視され、このようなソシユールらによって表明された「言語についての貧困な、およそ不適合な概念」（『言語と精神』41頁）は厳しく糾弾されることになるわけである。

1962年—この時期にはもうすでに先に言及した1963年の論文は執筆されていたが—に、チョムスキーは、第9回国際言語学者会議に提出するための論文を書いている。この論文には3つの異なったヴァージョンがあり、最初に書かれたものがChomsky (1962)である（ほかには、Chomsky (1964a), そして既に何度か言及したChomsky (1964b)がある。三者の間の関係に関する詳細については、Joseph (2002: 149)を参照のこと）。Chomsky (1962)は基本的に、その前に書かれたChomsky (1963)と同じ路線のものともていい。しかし、Chomsky (1962)と第9回国際言語学者会議に提出された論文Chomsky (1964a)とでは既に大きな違いがみられ、ソシユールが占めていた生成文法理論の理論的先駆者としての位置づけがフンボルトに取って代わられてしまったような感がある、とJoseph (2002: 149)は述べている。19世紀の言語思想において、言語の本質に関して2つの対立する考え方が区別できるとChomsky (1964a)は述べる。1つはフンボルトのような「内的な言語形式」という見方であり、もう1つは言語を「諸要素の目録」とみるホイットニーのような見方である。このホイットニーのような考え方にソシユールや構造言語学を、一方、フンボルトのような考え方には自身の理論を結びつけることができる、とChomsky (1964a)は述べている（Joseph (2002: 149)を参照）。Chomsky (1964b)になると、自身の理論の源流をさらに遡って17世紀合理主義思想に求め、ここで初めて

デカルトの名前が登場することになる。そしてポール・ロワイヤル文法から、18世紀末のロマン主義時代のヘルダーやJ.ハリス、A.W.シュレーゲル、そして最後にフンボルトへと流れていく、いわゆるデカルト派言語学の系譜が唱えられることになるわけである。特にチョムスキーは、フンボルトによって生成文法理論の拠るべき原理と基本的な考え方が示されたと考えることで、それに応じてソシュールがそれまでもっていた生成文法の理論的先駆者としての重要性が小さくなっていき、最後にはフンボルトや自身の生成文法理論と対峙させられることになるわけである。

このようにチョムスキーが、自身の理論の源流をソシュールではなく、フンボルトなどのデカルト派言語学の系譜のなかにみるようになるのは、この時期に行われた第9回国際言語学者会議（1962）あたりが1つのターニング・ポイントになったのではないかと Joseph (2002) は考えている。そこには、マサチューセッツ州ケンブリッジで開催されたこの国際会議にヨーロッパから出席したソシュール主義者たちとの関係などの理由もあったと思われるが (Joseph (2002: 150 - 1) を参照)、何よりも、Joseph (2002: 153) でも指摘されているように、ちょうどこの時期あたりからの生成文法理論内の理論的変化がその大きな動機づけとなっているということは、明らかなように思われる。ソシュールに対する対立姿勢が強まってくるように思われる1964年以降というのは、生成文法理論の内部において深層構造と表層構造という新しい概念が導入され、特に意味を直接に反映したより抽象的な構造である深層構造が仮定されるようになる時期である。このような理論的変化は、特にポール・ロワイヤル文法をはじめとするデカルト派の言語学者たちとは相性がいいが、ソシュールを含めた、表面的な語の並びのみに依拠した構造主義の考え方とはなかなか折り合わないのである。

しかし、特に1970年後半以降、深層構造の理論的存在意義が薄れていくにつれて、またソシュール、および構造主義言語学に対する対立姿勢も弱まってくるように思われる。例えば、既に1970年代後半の段階

でチョムスキーは、ミツ・ロナとの対話 (Chomsky (1977)) のなかで、彼の学説の変遷、特に「表層構造を強調することは構造主義への逆戻りではないか」という批判に対して、「構造主義への復帰に関して言えばね、なにはさておき、それが本当だと仮定してみたまえ—おおいに結構じゃないか！」(251)と答えている。そしてさらに1980年代に入り、GB(統率・束縛)理論の「原理とパラメターのアプローチ」を経て、改めて自身の言語学的立場を確認したように思われるのが、*Knowledge of Language* (1986)である。ここで彼は、ソシユールに触れて、「langueは音声の体系とそれに結びついた概念の体系と考えられており、文の概念は省みられない状態に置かれている—おそらくは言語使用の研究のなかに取り込まれることになるのではないか」(Chomsky (1986:19))としつつも、次のように述べていることが注目される(なお、この著作において初めて、従来の competence-performance の区別が廃止され、あらたに I 言語(内在化された知識体系としての言語)と E 言語(外在化された行為、産出物としての言語)が区別されることになり、前者の研究をこそ目指すべきであるということが主張される)。

(9) 言語を1つのコードやゲームとするおなじみの見方は、人為的に構成された E 言語ではなく、I 言語の方に目を向けている。コードというのは、表示の集合などではなく、むしろメッセージ表示に対してコード化された表示を付与するための特定の規則の体系と言える。外延的にみればそのメッセージコードの組み合わせが全く同じであったとしても、2つのコード体系が異なるということもある。また同様にゲームというものも、指し手の集合などではなく、そのような指し手の基盤にある規則の体系である。langue というもののソシユールの考えは、あまりにも狭い考え方ではあるが、以上のような点からみると、適切なものであると解釈することができよう。(Chomsky(1986:31))

つまりここではチョムスキーは、要素の集合でなくその基盤にある体

系とされるソシユールの langue の考え方を、自身の I 言語の考え方に通ずるものとして、それなりの評価を与えていることがわかるのである。しかし、ソシユールの langue の考え方が「あまりにも狭い考え方」とされるのは、これまでもみてきたように、それが言語の創造性や文の概念というものを適切に位置づけることができないからである。<sup>5)</sup>

#### 4. おわりに

これまでの議論を簡単にまとめると、チョムスキーの著作にソシユールの名前が登場するのは、Chomsky (1963) 以降であり、この論文が執筆された時期から 1964 年の論文までは、チョムスキーは基本的にソシユール主義的と言ってもよく、ソシユールを積極的に自身の言語論の拠り所としていたのであった。しかし、だいたい 1964 年以降、生成文法理論内部における理論的發展、特に深層構造という概念が導入されるようになってからは、『デカルト派言語学』や『言語と精神』などの著作にみられるように、ポール・ロワイヤル文法やフンボルトに代表されるデカルト派言語学の系譜に自らの言語学を位置づけ始め、むしろソシユールとは対立的な立場にあることが明確にされるようになる。そして、さらにその後生成文法理論の理論的変遷とともに、深層構造のもつ独自の意義が薄れていくに従って、これまでみてきたようなチョムスキーのソシユール評価のトーンの変化にみられるように、結果としてソシユールへの接近がみられるようになったのではないかと思われる。特に 1990 年代以降から現在に至るミニマリスト・プログラムでは、言語機能は最適に設定されていると考えられており、最小限必要とされる表示レベルや原理、概念しか認められない。つまり、必然性のある表示レベ

5) Chomsky (2004) に収められた「21 世紀の言語学」と題された福井・辻子によるインタビューのなかでもまた、チョムスキーはソシユールに触れ、「フェルディナン・ド・ソシユールの体系においても、「文」という概念を適切に位置づけることができません。それはパロールとラングの間のどこかには必ずありますが、そのどちらでもないのです」(288-9 頁) と述べている。

ルとしては、論理形式 (LF) と音声形式 (PF) のみであり、言語表示レベルとしての深層構造はここで完全に破棄されることになり、同時に変形規則なども姿を消すことになり、結果的に統辞論の役割も大きく減少している (Chomsky (1995) を参照のこと)。こういった状況は、正に Joseph (2002 : 154) でも指摘されているように、langue を「基本的には文法上の特性をもった記号の貯え」(Chomsky (1962)) とするソシュールの立場にほぼ回帰したものであるとも言えるのではないだろうか。

以上のようにみえてくると、ソシュールに対するチョムスキーの評価が長い年月のなかで変化し、場合によっては食い違いさえ生じているようにみえるという事実は、チョムスキー自身の理論的立場の変化とはっきりとした対応関係があると言えるだろう。またチョムスキーのソシュール評価のあり方にしてみても、体系的というよりは断片的な印象が強く、さらに言えば、チョムスキーは常に「自身のその時その時の重要課題にしたがってソシュールを読んできた」とする Joseph (2002 : 155) の指摘は、基本的な点において正しい主張のように思われるのである。

## 引用文献

- Aarsleff, H. 1970. "The History of Linguistics and Professor Chomsky".  
Language 46. 570-85.
- Chomsky, N. 1959. "A Review of B.F. Skinner's *Verbal Behavior*",  
Language 35. 26-58.
- Chomsky, N. 1962. "The Logical Basis of Linguistic Theory". *Preprints  
of Papers from the Ninth International Congress of Linguistics*, 27-31  
August, Cambridge, Mass. 509-74.
- Chomsky, N. 1963. "Formal Properties of Grammars". In *Handbook of  
Mathematical Psychology*, edited by R. D. Luce, R. R. Bush and E.

- Galanter. 322-418. London & New York: Wiley.
- Chomsky, N.1964a. "The Logical Basis of Linguistic Theory". *Proceedings of the Ninth International Congress of Linguistics*, edited by H. G. Lunt. 914-78. The Hague: Mouton.
- Chomsky, N.1964b. "Current Issues in Linguistic Theory". In *The Structure of Language: Readings in the Philosophy of Language*, edited by J. A. Fodor and J. J. Katz. 211-45. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall. (橋本萬太郎・原田信一訳『現代言語学の基礎』所収「言語理論の現在の問題点」大修館書店.)
- Chomsky, N.1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass: MIT Press. (安井稔訳『文法理論の諸相』研究社.)
- Chomsky, N.1966. *Cartesian Linguistics: A Chapter in the History of Rationalist Thought*. New York: Harper & Row. (川本茂雄訳『デカルト派言語学』テック/みすず書房.)
- Chomsky, N.1968. *Language and Mind*. New York: Harcourt Brace Jovanovich. (川本茂雄訳『言語と精神』河出書房新社.)
- Chomsky, N.1977. *Dialogues avec Mitsou Ronat*. Paris: Flammarion. (三宅徳嘉・今井邦彦・矢野正俊訳『チョムスキーとの対話—政治・思想・言語』大修館書店.)
- Chomsky, N.1986. *Knowledge of Language*. New York: Praeger.
- Chomsky, N.1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass & London: MIT Press. (外池滋生・大石正幸監訳『ミニマリスト・プログラム』翔泳社.)
- Chomsky, N.2004. *Generative Enterprise Revisited*. Berlin : Mouton de Gruyter. (福井直樹・辻子美保子訳『生成文法の企て』岩波書店.)
- Culler, J. 1986. *Saussure*. 2nd ed. London: Fontana.
- デ・マウロ, トゥリオ .1976. 『「ソシュール—般言語学講義」校注』(山内貴美夫訳) 而立書房.
- Harris, R. 2001. *Saussure and His Interpreters*. New York: New York



University Press.

Humboldt, W. von 1836. *Über die Verschiedenheit des Menschlichen Sprachbaus*. Berlin. (亀山健吉訳『言語と精神』法政大学出版局.)

Joseph, J.E. 2002. *From Whitney to Chomsky: Essays in the History of American Linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Lyons, J. 1977. *Chomsky*. 2nd ed. Harsocks: Harvester. (長谷川欣佑・馬場彰訳『チョムスキー』岩波書店.)

丸山圭三郎 1981. 『ソシユールの思想』岩波書店.

興津達朗 1996. 『言語学史』(「英語学大系」14) 大修館書店.

Saussure, F. de. 1983. *Course in General Linguistics*. Translated by R. Harris. London: Duckworth. (小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店.)